

新聞の社会的役割と 消費税軽減税率

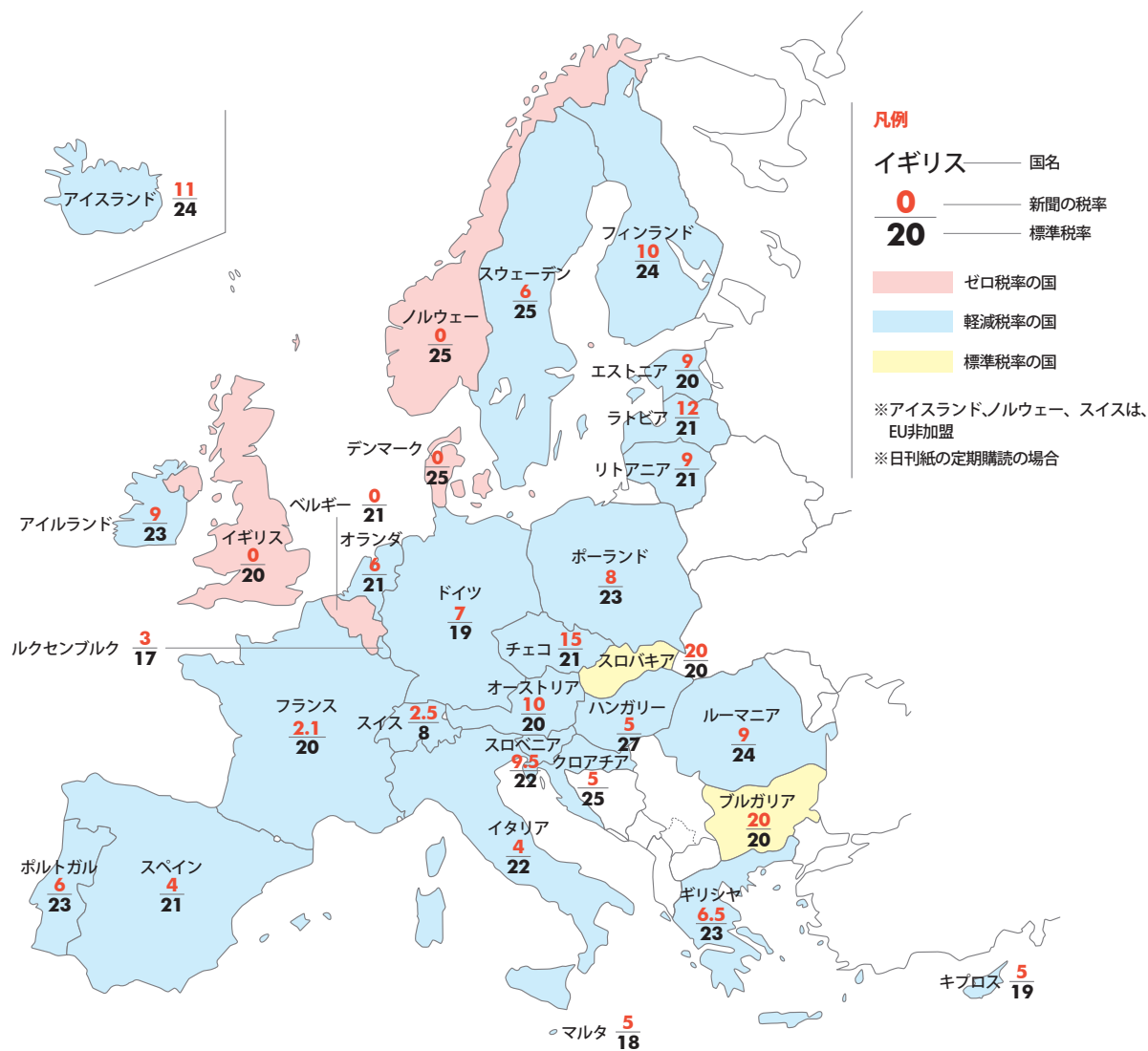
※日本新聞協会は、4月6日からの春の新聞週間に際して、新聞は社会の様々な局面で公共的な役割を果たしていて、欧州で定着している消費税の軽減税率を適用するのにふさわしいと考えている有識者3人のインタビュー記事を加盟各紙に掲載しました。

※参考として欧州各国の軽減税率の適用状況を図表にしています。

一般社団法人
日本新聞協会

欧州諸国における付加価値税率

(欧州委員会の資料などをもとに作成)



☆新聞は人生の道しるべ

鎌田實・医師、作家

小さい頃のわが家は貧しく、父も小学校しか出ていない人だったが、新聞は熱心に読んでいた。家にテレビはなく、僕も新聞を読むのが日課だった。夏休み、みんなが海水浴に行くのに僕はどこにも連れて行ってもらえなかった。だが、いつか大人になったら同級生の誰よりも世界を飛び回る人間になりたいと、新聞を読みながら思っていた。

病気がちだった母のような人を治せる職業に就きたいと医学部を目指したのも、40年前に今の病院に来て在宅医療をやり始めたのも、チェルノブイリ原発事故の被災地に医師団を派遣するようになったのも、常に新聞がヒントを与え、生きる道を示してくれてきたように感じている。

今は僕が子どもの頃よりも格段に格差社会が進み、子どもたちが貧困から抜け出して勉強できるチャンスが少なくなりつつある。子どもが関わる残虐な事件も起きているが、こうした子どもたちはきちんと新聞を読んでいるのだろうか。読んでいれば、自分が社会からどう見られ、自分の人生がどうなっていくか、客観的に考えることができるのにと思うことが少なくない。

そういう意味では、経済的に苦しい家庭が消費税の増税を機に新聞を取るのをやめてしまうことで、その家の子どもは世界に視野を広げ、環境を変えて自分の人生を自ら切り開いていくチャンスを失ってしまうのではないかと僕は心配している。

子どもに限らず、新聞が持つ力は大きい。世界とつながり、国内の政治や経済の問題を知り、一方で自分が住む地域の細かな問題を見ることもできる。弱者への温かいまなざしを含め、インターネットで探せば必要な情報が手に入るというのとはちょっと違う。地方都市の消滅可能性が言われるが、地方の再生にとっても新聞は大切な「血管」の役割を果たしている。切ってはならないものだ。

資源のないこの国にとって、一人一人が知識を持ち、考え、議論するということが何よりの宝物のはず。権力者は何も考えず文句を言わないでくれた方が楽だと思えるかもしれないが、それではいつかしっぺ返しがある。新聞には時の権力を忖度（そんたく）せず、言うべきことを言うべき時に言う姿勢を貫いてほしい。

◎鎌田實氏略歴

鎌田實（かまた・みのる）1948年東京生まれ。東京医科歯科大卒。74年、長野県茅野市の諏訪中央病院に赴任後、地域医療や在宅ケアに力を注ぎ、88年院長、2005年から名誉院長。近年はイラクで住民への医療支援にも取り組む。「がんばらない」など著書多数。

☆新聞は脳を鍛える

茂木健一郎・脳科学者

お行儀が悪いのだが、朝ご飯を食べながら新聞を読んでいる。一面をさっと確認し、後ろの社会面などから一面に近づいていく。柔らかい記事から堅い記事に、頭を慣らしていく感じかな。毎朝全国紙3～4紙と英字紙、地方に行ったときは地方紙も読む。まんべんなく読むと、1日かかっても読み切れない。でも、読み方が分かると、パッと見て、興味のある記事を見つけられるようになる。

新聞が発信する一番大きな情報は、実は見出しとレイアウトにあると思う。新聞は見出しの大きさと、ニュースの社会的な価値を視覚ではっきりと脳に伝えている。小学2年生の時、三島由紀夫が自決した。社会的な意味など全く分からなかった。しかし、一面の見出しの大きさと、ものすごい事件が起きたことは分かった。「浅間山荘事件」「ロッキード事件」なども当時の新聞紙面が頭に浮かぶ。ニュースの重みが、視覚的に頭の中にファイルされている。時代の記録において新聞紙面に勝る物はない。

大切なのは、そのニュースが社会でどのように受けとめられるものなのか、その「相場」を知ることだ。価値基準を確立しないまま、自分の知りたいことだけをネットで検索し、うのみにするのは危ない。脳科学を研究する立場からすると、新聞を読むことは、自分で情報を選択する能力を鍛えることにつながると思う。ネットが普及した今こそ、世間の常識や、ニュースの社会的な意味付けを把握できる新聞の役割は高まっている。

新聞は地域コミュニティの担い手でもある。地方紙を読むと、お悔やみ欄などのきめ細かな情報に驚かされる。消費税が上がれば、新聞の購読者も減ってしまう。新聞の公共性を考えれば、誰もが負担を感じずに新聞を読めるようにしておいた方がよい。

ただ、新聞社も活字離れを嘆くだけでなく、若者が読みたいと思う紙面を作らなければいけない。私が子どもの頃は、V9時代の巨人の試合結果を読むために新聞をめくっていた。読んでいると、ほかの記事にも目が行く。きっかけは何でもいい。新聞に興味がない若者でさえも「なにか紙面で面白いことやっているらしいぞ」と、ネットでうわさをする。そのぐらいの仕かけを考えてほしい。

◎茂木健一郎氏略歴

茂木健一郎（もぎ・けんいちろう）1962年東京生まれ。東京大学大学院物理学専攻博士課程修了。理化学研究所、英ケンブリッジ大学を経て、現在ソニーコンピュータサイエンス研究所シニアリサーチャー。著書に「脳とクオリア」「脳と仮想」（小林秀雄賞）など。

☆新聞は「大人への入り口」

内山奈月・AKB48

高校の授業で憲法9条や25条など重要な条文を学んだとき、他の条文も一緒に暗記しました。それをコンサートで披露する機会があったときに、『『アイドルが憲法』とは面白い』と言われました。実は活字が好きで、幼少期から方丈記などの名文を暗唱していました。

高校時代は、新聞を使った授業があり、社会への関心を持つようになりました。新聞部の先生が見出しのつけ方を教えてくれることもありました。大学生になると、自分で情報を得なければなりません。それで新聞を読むようになりました。

地学や宇宙に関する記事が好きです。同じ読むのでも、スマートフォンより紙の新聞の方が「かっこいい」と思います。

両親や祖母の影響も受けました。自宅では父が経済紙、母が一般紙を読みます。私はそれを外で持ち歩くこともあります。出先で買って、電車で読むこともあります。出先では自宅で購読しているものとは別の新聞を買います。同じニュースでも記事は異なるし、さまざまな角度から物事を見ることができると思うからです。

ネットで読む好きな情報だけでは大人の話についていけません。仕事で大人と対等に会話するためにも、新聞で話題を探します。

新聞を読むと、興味が薄かったテーマも目に入り、面白さに気づきます。新聞は「大人への入り口」です。知性を蓄積していく、というイメージで読み続けたいです。

AKB48に興味がなかった友人も、新聞で取り上げられると、「すごいね」と連絡をくれます。そのときは、新聞の読者の広がりはいかにあるんだと再認識します。

昨年7月、「憲法主義 条文には書かれていない本質」(PHP 研究所)を出版させていただける機会に恵まれました。九州大学法学部の南野森(みなみの・しげる)教授との共著です。南野教授が私を生徒に見立て、憲法について講義をする対談形式の内容です。この本では、憲法が縛る対象は国民ではなく、国家権力であり、私たちは憲法で守られているということも書いています。

マスコミが発信する情報は膨大で、憲法の基本的なこと、大事なことが見えにくいこともあると思います。それを発信し、親しみやすいものに変えていける存在になりたいと思います。

◎内山奈月氏略歴

内山奈月(うちやま・なつき)1995年神奈川県生まれ。2012年にAKB48に研究生として入り、13年の日本武道館でのコンサートで特技の日本国憲法暗唱を披露。その後、正規のメンバーに。14年4月、慶応大学経済学部に入學。